東日本大震災についてのアンケートの概要

１　目的

東日本大震災で体験したこと、感じたことを数値にまとめて全国に発信することで、障がい児に対する理解・啓発の推進を図ると共に、会員相互の共通理解を図って PTA 活動に取り組むことができるようにする。

２　実施期間

平成 25 年 6 月 27 日～7 月 19 日

３　方法

質問紙による

４　対象者及び回答率

県内の県立特別支援学校の保護者　　１，９６８名
回答数（回答率%）　　１，３０３名（６６．２%）

５　集計方法

○　各学校で回答を集計し、その結果を事務局が集計した。
○　すべての項目について、下記による地域別（浜、中、会津）と障がい種別（視覚、聴覚、病弱、肢体不自由、知的）で比較し、差が見られた項目のみ、地域別又は障がい種別に表した。差が見られなかった項目については、合計数で表又はグラフに表した。

○　障害種別

障がい種	学校数	回答者数（人）	学　校　名
視覚障がい	１	３５	盲学校
聴覚障がい	４	８３	聾学校、聾福島分校、聾会津分校、聾平分校
病弱	４	６９	須賀川養護学校、須賀川郡山分校、須賀川医大分校、会津竹田分校
肢体不自由	２	１８５	郡山養護学校、平養護学校
知的障がい	１０	９３１	大笹生養護学校、あぶくま養護学校、あぶくま安積分校、西郷養護学校、石川養護学校、会津養護学校、猪苗代養護学校、いわき養護学校、富岡養護学校、相馬養護学校

○　地域別

地区	学校数	回答者数	学　校　名
浜通り	５	２７２	聾平分校、平養護学校、いわき養護学校、富岡養護学校、相馬養護学校
中通り	１２	８５３	盲学校、聾学校、聾福島分校、須賀川養護学校、須賀川郡山分校、須賀川医大分校、郡山養護学校、大笹生養護学校、あぶくま養護学校、あぶくま安積分校、西郷養護学校、石川養護学校
会津	４	１７４	聾会津分校、会津竹田分校、会津養護学校、猪苗代養護学校

Ⅰ　現在のお子さんについて

1　お子様の学部（人）

幼稚部	9
小学部	481
中学部	299
高等部	503
専攻科	11

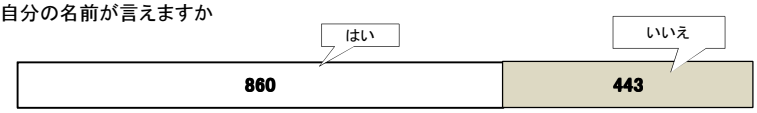
2　障がいの種類（複数回答あり）

	視覚	聴覚	病弱	肢体	知的
回答者数（人）	35	83	69	185	931
視覚	33	1	1	11	10
聴覚	1	82	0	3	10
病弱	0	0	23	1	10
肢体不自由	5	3	9	165	70
知的	10	6	20	55	601
自閉症	0	2	5	1	335
発達障がい	0	2	16	13	165
他	0	0	14	10	24

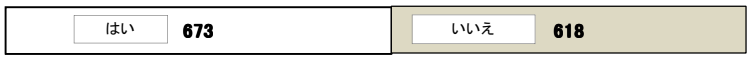
3　居住地

県北	234
県中	398
県南	197
会津	177
相双	52
いわき	226
県外	3
無回答	16

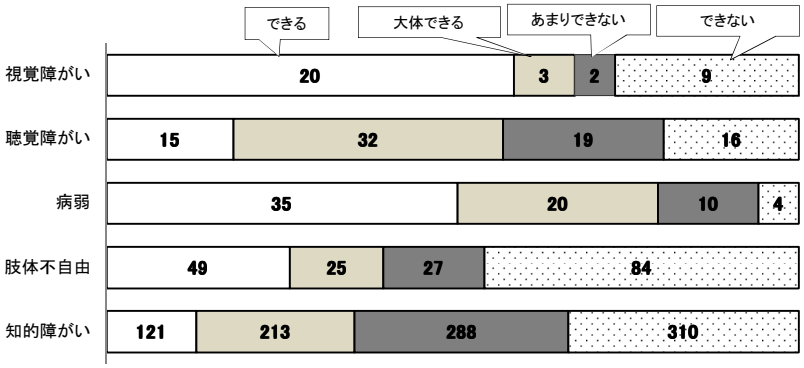
4　自分の名前が言えますか



5　学校名が言えますか



6　支援して欲しいことを伝えることができますか



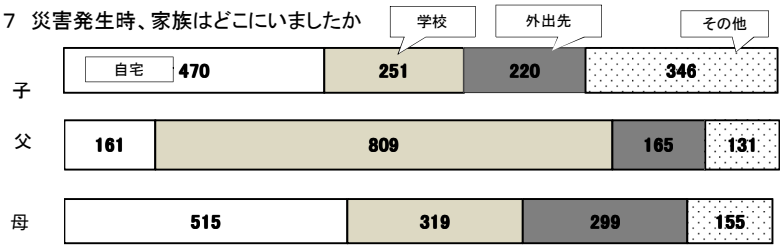
Ⅰ　現在のお子さんについて

○　自分の名前は約7割、学校名は5割の子どもが言えるが、支援してほしいことを伝えられるは4割。災害が起きたとき、障がいのある子どもの半数以上は助けてほしいと伝えることができない状況にある。

○　障がい別に見ると、肢体不自由及び知的障がいは他の障がいに比べ自分の意思を伝えることができる割合が低いことが分かった。

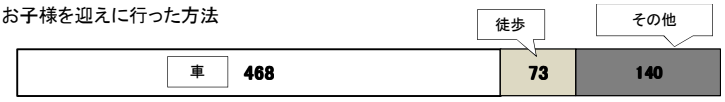
Ⅱ　災害発生の状況

7　災害発生時、家族はどこにいましたか

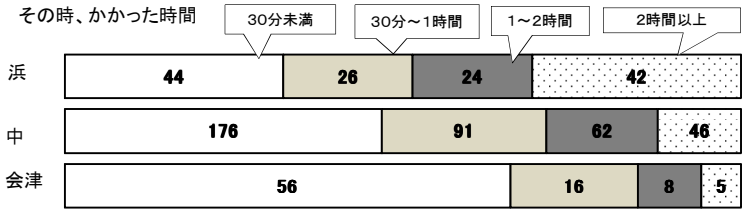


8　災害発生時、子どもと一緒でしたか

お子様を迎えに行った方法



その時、かかった時間



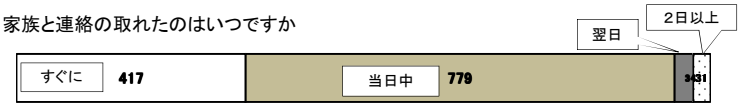
Ⅱ　災害発生の状況

○　震災の日は卒業式でいつもより早い下校となった学校が多かったため家庭にいた子どもたちは3割強だった。
　父親の約1割、母親の約4割が自宅にいた。

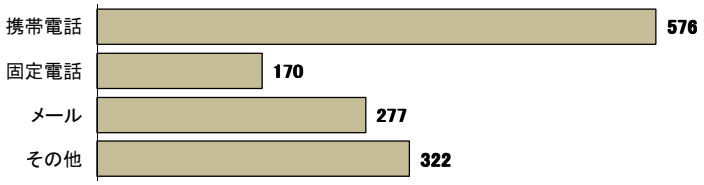
○　震災があった時、保護者の半数以上が子どもと一緒ではなかった。また、約7割が車で子どもを迎えに行った。

○　子どもを迎えに行くのにかかった時間は、1時間以内が中通りは約7割、会津は8割以上であり、比較的短時間で子どもを迎えに行くことができた。しかし、浜通りは約3割が2時間以上かかった。
　地域によっては、震災後、主要道路が渋滞して、車で迎えに行くことが困難だったためと思われる。

9 家族と連絡の取れたのはいつですか

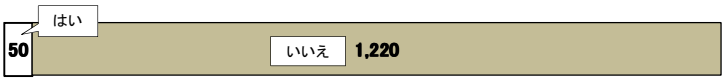


10 連絡はどのような手段でしたか



○ 家族との連絡は、どの地域も9割以上がその日のうちに取れたが、2日以上かかった家庭もあった。
連絡方法は、携帯電話が576名、メールが277名、固定電話が170名と、圧倒的に携帯電話が多かった。震災直後から携帯電話はつながりにくなったが連絡手段としては携帯電話が最も多かった。
その他は2番目に多かったので、具体的な方法を記載する欄を設ける必要があった。

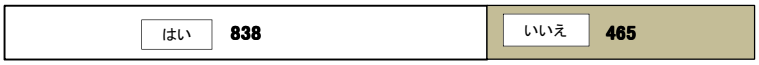
11 災害伝言ダイヤルを利用しましたか



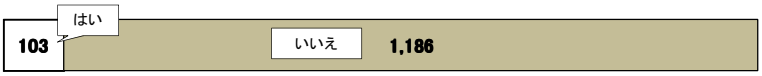
○ 災害伝言ダイヤルの利用については、わずかに3．8%だった。携帯電話につながらない時等、便利な方法であるが、利用方法について、まだまだ普及していないことが分かった。

Ⅲ 防災意識について

12 地域の避難場所を知っていますか

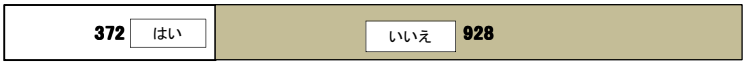


13 地域の防災訓練に参加したことがありますか

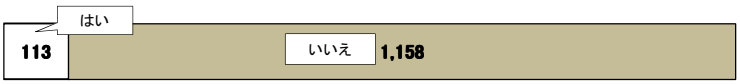


14 学校、寄宿舎、施設での避難場所、連絡方法を知っていますか

15 非常持ち出し品の準備を準備していますか



16 要援護者登録をしていますか



17 通学時に災害にあったときの対処法を確認していますか

18 災害時の家族間の連絡方法を決めていますか

Ⅲ 防災意識について

○ 防災意識（№12～17）については地域により差はなかった。

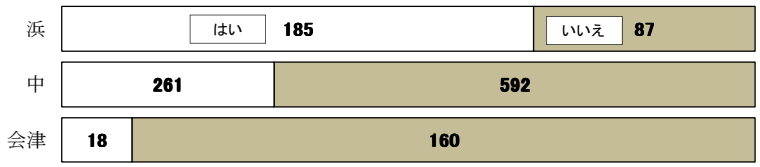
○ 地域の避難所については6割以上が知っていたが、学校、寄宿舎、施設等の避難所や連絡方法、通学時に災害にあった時の対処法を知っていたのは、すべて半数以下だった。

○ 非常持ち出し品を準備したのは3割以下、地域の防災訓練参加、要援護登録をしているのは、ともに1割以下とわずかの家庭しか取り組んでいないことが分かった。

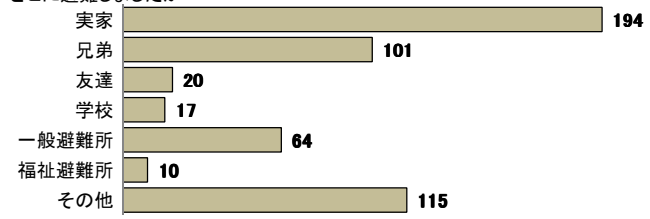
○ 震災を経験して、防災意識が高まったと思われたが、予想外に低かった。また、要援護登録については、その制度について周知されていないと思われる。

Ⅳ 震災発生後について

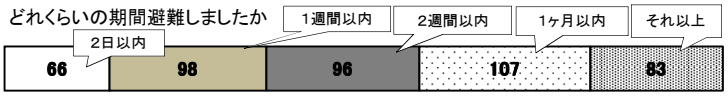
19 震災後に避難しましたか



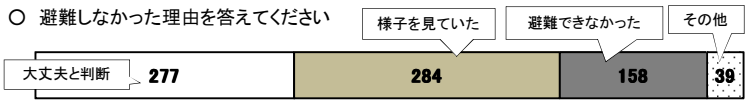
○ どこに避難しましたか



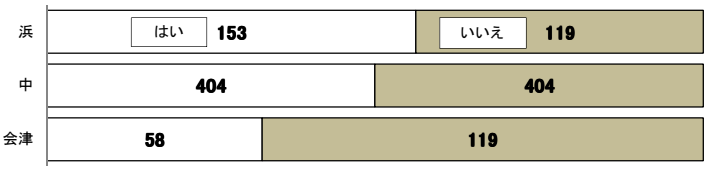
○ どれくらいの期間避難しましたか



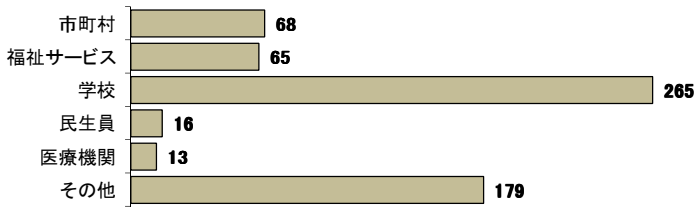
○ 避難しなかった理由を答えてください



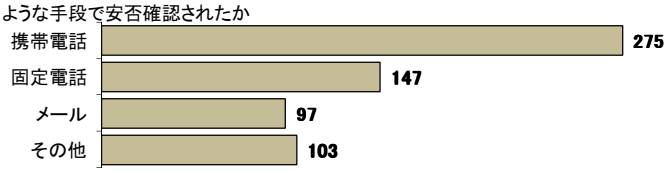
20 安否確認されましたか



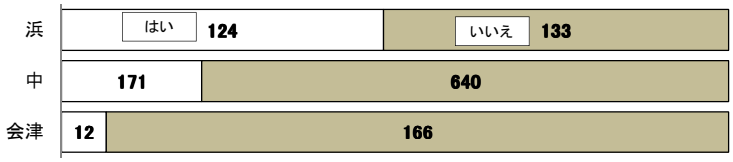
○どこから安否確認されましたか



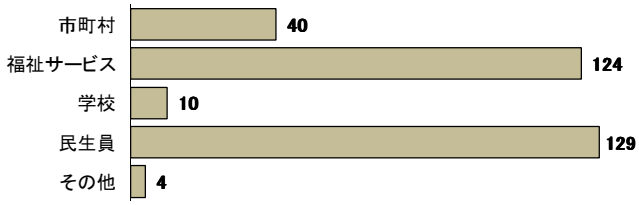
○どのような手段で安否確認されたか



21 物資の支援はありましたか



○どこから支援されましたか



Ⅳ 震災発生後について

○ 震災後に避難したのは、浜通りが7割弱、中通りが約3割、会津が約1割と、地域により大きな差がみられた。このことは、地震、津波の被害だけでなく、原発事故の影響が大きく関係していると考えられる。

○ 避難した場所は実家や兄弟の家が半数以上で、避難した期間は、1週間以内が約3割だが、1割以上は1か月以上で、どれも地域による差は見られなかった。
なお、避難した場所については、その他の回答が多かったので、具体的な場所の記載が必要であった。

○ 避難しなかった理由は、大丈夫と判断又は様子を見ていてが合わせて約7割だったが、約2割は避難したくとも何らかの理由でできなかったと答えている。

○ 安否確認については、浜通りと中通りでは半数以上が、会津でも3割以上が確認されている。
学校から確認されている家庭が最も多く、確認方法は携帯電話、固定電話、メールの順でだった。

○ 救援物資の支援を受けたのは、浜通りが最も多く約5割、中通りが約2割、会津が1割以下で、福祉サービスや民生委員からが多かった。

○ 支給された物資の中で不足した物
・飲食物：水、米、パン、、野菜、食料全般、汁物、離乳食
・日用品：毛布、下着類、衣類、ティッシュ、電池
・衛生用品：紙おむつ、生理用品、マスク、包帯類
・その他：ガソリン、灯油、トイレ、電気、ガス、薬

Ⅴ　今後の対応について

22　震災時に、市町村や学校、福祉サービス事業所等の対応でよかった点、改善してほしい点

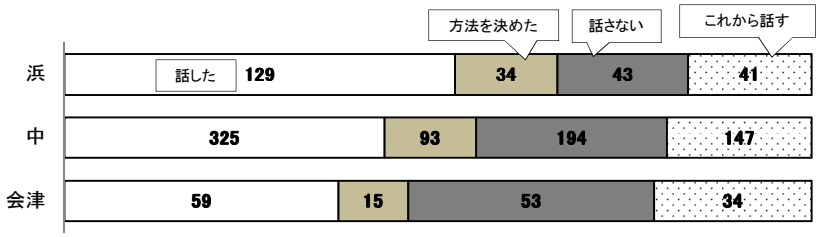
	よかった点	改善してほしい点
地　　域	・水の確保ができた。 ・近所等の協力が得られた。 ・連絡、指示がもらえた。	・情報がほしかった。 ・避難場所が分からなかった、行けなかった。 ・水、ガソリン、その他の物資不足。 ・障がい者、弱者への対応不足。 ・地域で声をかけたり、連絡方法を知らせてほしかった。 ・安否確認がない。
学　　校	・担任による電話、訪問、付き添い。 ・迅速な子どもの避難と対応。 ・支援物資の配布。	・より早い連絡方法。 ・子どもや保護者が安心できる対応。 ・学校の開放、早めの再開。 ・校舎の耐震化
福祉サービス事業所	・受け入れと対応。 ・安否確認があったこと。 ・支援物資の配布。 ・情報提供。	・安否確認、支援がなかったこと。 ・連絡方法の確認。 ・サービス再開が遅かったこと。 ・避難場所として利用を希望。
そ の 他	・所属する団体からの連絡。 （安否確認や情報提供） ・主治医や薬局の対応。 ・知り合いからの支援や情報提供。 ・給水車が近くまで来た。	・行政からの情報提供。 ・病院に関する情報、病院での対応。 ・障害児・者のための避難や生活スペースの確保。 ・避難所での対応。 ・店やバスでの対応。

Ⅴ　今後の対応ついて

○　震災時に対応でよかった点は、安否確認をしてもらったこと、地域では水の確保ができたこと、近所の協力が得られたことで、学校では、担任が電話や訪問、下校時の付添いをしたこと、福祉サービス事業所では、サービスの受け入れと対応、その他では、所属する団体からの安否確認や情報提供、主治医や薬局の対応が多くあげられている。

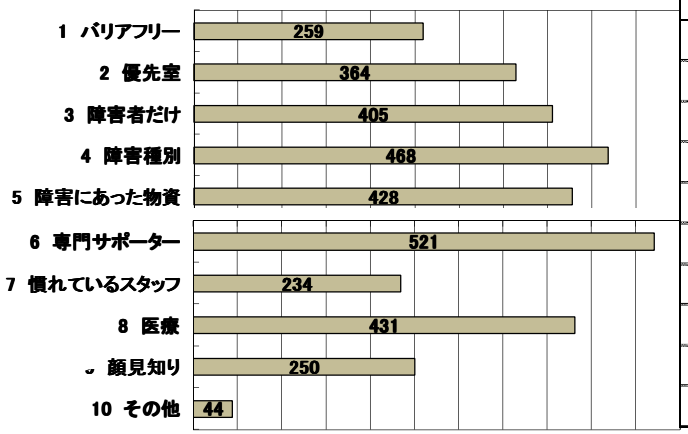
○　改善してほしい点では、地域では情報提供不足、学校は連絡方法の確認、福祉サービス事業所では安否確認や支援がなかったこと、その他では行政からの情報不足等が多くあげられている。

23　同じような災害があると考え、連絡や避難方法について家族と話し合いましたか



○　同じような災害があることを考え、連絡や避難の方法について家族で話合ったり、その方法決めたのは、最も被害が甚大だった浜通りが多く約6割で、中通りが約5割、会津は約4割だった。

24　避難所での環境について必要だと思うことを3つ選んでください



障がい種別上位3項目の順位

項目No.	全体	視覚障がい	聴覚障がい	病弱	肢体不自由	知的障がい
1		3			2	
2						
3						3
4	2	2	2		3	2
5		1	3	3	1	
6	1		1	2		1
7						
8	3			1		
9						
10						

25　特別支援学校を避難所にすることで、良いと思われる点

○　子どもが安心できる（29%）
○　バリアフリーなど設備が整っている（23%）
○　専門員やサポートが充実している（21%）
○　他の人の目を気にせずにいられる（17%）
○　利便性（4%）
○　情報交換等、親にとって行動しやすい（4%）

○　避難所の環境で必要と思うことは、専門のサポーター、障がい種別の対応、医療面での相談、障がいに合った物資、障がい者だけの避難所の順に多かったが、上位3位は障がい種によって異なることが分かった。

○特別支援学校を福祉避難所にすることでよいと思われる点は、子どもが安心できる、バリアフリーで施設が整っている、専門員やサポートが充実している、人の目を気にしないでいられる等、多くのメリットがあげられており。特別支援学校は福祉避難所に適していると考えている人が多いことが伺える。

２６　今回の震災で気づいたこと、今後の福島に向けての提言、意見、要望等

＜気付き・思い＞

・日頃から地域とつながりをもち、子どもの障がいの実情や困り感を知っていてもらうことで、非常時にも周囲からのスムーズなフォロー、援助があり、たいへん助かった。今回は精神的にも本当に多くの方に支えていただいた。この経験から、私にも何かできることはないだろうか？障がいをもつ子どもの親だからこそ、気づいて動けることはないだろうかと今まで以上に考えるようになった。
・自分たちの経験を（失敗も含めて）みんなに発信していく。
・重度自閉症の母です。水素爆発した時、近所の人は避難していく中、娘はあんな小さなスペースでしかない避難所に入ることができず、親せきや知り合いの家にも迷惑がかかると思い、どこにも避難せず、家に、もう、この家で娘と２人で死ぬ覚悟で、食料もガソリンもない、この家にいるしかないと思っていました。そのくらい、障がいを人をかかえた家族には、同じ避難所は無理です。
・今まで水に無頓着でしたが、２時間も並んで水２袋もらえただけでした。水がないと何もできないことに気づきました。
・何事もないのが当たり前だと思っていました。朝起きてあたたかいご飯が食べられる、水が出るのが当然で電気もつく、そういう生活に慣れていたと思います。時折キャンプをして不便な生活をすることもありました。人間って小さいものかもしれません。慌ててしまうとどうしていいかわからなくなってしまいますから・・
・震災後は人の温かさや当たり前に過ごしていた日常が、とても大切で幸せだったことに気づかされた。これからは生きることがとても素晴らしいことだと自分に言い聞かせ、一日一日を大切に生きていこうと思う。
・自然災害はどうすることもできない出来事だが、日頃からの備えが大事だと分かった。非常食やガソリン、灯油などないと困る物ばかりだった。
・想定外という甘さの中にいては、守れるものも守れなくなるので、常に何事にも最善を尽くす。
・家族の絆が深まった。
・震災後、たくさんの国や人々が支援をしてくださいました。風評など様々なこともあり、つい支援してくれた人々への感謝を忘れてしまいそうになります。「被災者」ということに甘えることはもうやめて、自分の足で前に進むことが支援者の方々への応えになるのではないでしょうか。
・学校からは「地域に出て」と言われるが、正直、周囲が皆、養護学校の先生のような方ばかりとは限らない。実際、「あまり養護学校だと言わないほうがいい。」と言われたことも。そんななか、震災が起き、避難所へは行けなかった。
・情報伝達の速さと非常用物資の確保は、これからの課題だと思う。幼児のミルク、食事、おむつ、介護食など、災害時に調達が難しくなる物は備蓄する必要があると思う。
・サポートブックなど個人にあった情報を持たせるなど障がい合った支援を求められるよう（一般の方にも）工夫することが大切であると感じた。

＜支援＞

・障がい者にあった支援は、特別なことでなく、その人に必要なもの。特別扱いと誤解されやすいですが、積極的に支援してほしいです。震災での経験を大切にし、悪かった点は改善に努めてほしい。障がい者と家族が、肩身が狭い思いや不安をやわらげるための対策をとってほしいと思う。
・障がい者だけの避難所をつくってしまうと、隔離状態となり、サポートする人がそこにだけ多数必要となり逆に危険性が高くなるので、どこへ行ってもアドバイスできる、障害者が安心して過ごせる指導のできるサポーターが大事になる（必要）と思います。
・入学前だったため、重度の障害児がいても、どこからも誰からも連絡がこなかった。電話一本でも安否確認してもらえるだけでも安心できる。ミキサー食なので、一般食では食べられない。おかゆのレトルトパックなども備蓄してほしい。薬が手に入らず大変な思いをした。命にかかわる問題。
・両親ともに働いている場合、会社指示や道路状況で迎えに行くことができない時もあります。学校もしくは病院等で一時保護してもらえると安心できると思いました。
・震災・原発事故と想定以上の避難者が出たと思います。今後地域の支援学校、避難先の地区支援学校が障がい者すべての避難所になれば少し安心できるかも？
・障がい者をかかえての避難は、本人はもとより家族の負担や心労はとても大きい。しかし、情報は少なく、がまんや押さえつけの避難生活でとても苦労した。
・避難所に行けない場合に、物資の支援や安否の確認等の援助が受けられるようにしてほしい。
・多動でさわがしいこの子をつれて、その中で生活する自信がない。障がいを理解してくれ、障がいに合ったサポートをしてくれる避難所を必ず整備してほしい。

＜県・市＞

・要援護者を無視している部分が多すぎる。市や施設などの間で連携がとれていないため、最終的には放置されてしまう。学区外通学の子には、ホールボディなどの案内もこない。さらに県や市に入ってきた物資を無駄にしすぎでは？
・市役所からの援助が早かった。持ち車をみんなのために使ってくれたり、本当に市役所に勤めている方に感謝でした。
・役所、学校の先生方、公務員の方の横のつながりが薄いのでもう少し関係を改善してほしい。
・家に来た市役所職員に「障がいをもった子どもが避難できる場所はありますか？」と聞いたら「部署が違うからわからない」と言われた。避難場所くらい答えられるようにしてほしい。
・震災後の支援（キャンプやレクレーション等）は、健常者向けがほとんどで、障がい児対象ものは少ないので、県でもう少し考えてほしい。
・支援学校（学級）に通う子どもたちを持った家族は、自由に転校できる家族とは違い、受け入れてくれる学校が見つからないと移動できないので、今回避難したくてもできなかった方々がたくさんいたと思う。県全体でそのことを考えてほしい。
・放射能問題があったためそれぞれが守るものがあり、当時の対応に「助けてくれなかった。」と言うつもりはない。今後このようなことも起こりうるということを考慮して自治体、行政の対策が進むことを期待する。

＜原発＞

・原発問題が将来までかなり影響が出てくると思う。表面上は通常の生活をしているが、原発の危険性を知る代償としては全てのことが大きすぎる出来事だった。今後、大きな災害が起こらないことを祈りつつ、エコも実践し、異常気象に気をつけて生活していきたい。
・震災後、原発の影響で子供たちは今まで通っていた学校へは行けない、友達と離ればなれ、育った町、家では生活できず、不安な日々を過ごしたと思う。新しい環境生活でも、子ども達は友達を作り、がんばっている姿に勇気をもらっています。
・気になることは子どもの健康。原発関係が不透明なことで、もし、健康上生活に支障が起きた時の対策、例えば、新薬の開発。事態が変わったときにすぐ対応できる体制を築いて行くこと。正直、東電や国を攻め続けても話は進展しません。今後の生活の基礎を確立できる体制を整えることと思います。

家庭科室（須養郡山分校）

敷地の亀裂（相馬養護学校）

支援物資

校庭の表土入れ替え（盲学校）

避難所（盲学校体育館）